九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

一九、二〇世紀におけるフランスの農業構造 : 北部フランスの場合

湯村, 武人

https://doi.org/10.15017/4362555

出版情報：經濟學研究. 28 (4), pp.1-30, 1962-10-25. 九州大学経済学会
バージョン：
権利関係：

一九、二〇世紀におけるフランスの農業構造

――北部フランスの場合――

湯村武人

(一)まえがき

大革命以後、ことに一九世紀におけるフランス経済史の研究は、中・近世期におけるそれがめざましい発達をとげつつあるのに比較して、いちじるしく立ち遅れていると云える。農業史の分野におけるその遅れはことにはなはだしいと云わねばならない。もちろん、レオン・ド・ラヴェルニュを始め、オージェ・ラリベやアンリ・セエなどの諸学者や、社会主義的視角からのコンペール・モレルの著書などいくつかの研究書は(註1)あるわけであるが、いずれもきわめて概説的であるか公式論の域を脱しない。むしろ、その本来めざすところは政治史的なものであるにも拘わらずマルクスの諸著作、ことに『ルイ・ボナパルトのブリュメール十八日』にみられる分析などのほうが今日なお教えるところが多い。最近ようやく産業革命史の研究が盛んになりつつあるが、(註2)その成果に照らしても農業史の分野における研究の遅れが痛感される。やっと本格的な研究の緒についたこれらの産業革命史の諸研究が今後なお一段と深められるためにも、基盤と

しての農業史の研究が進展することが必要であろう。

一九世紀農業史のこうした現状をもたらした最も大きな原因は、おそらくは歴史家たちの関心が従来主として大革命そのものにむけられていたことにもよるが、充分な分析を行なうにたる統計や資料が著しく缺けていたという事情にもよる。フランスにおける全国的農業統計は一八三六年七月の地方長官通牒にもとずいたものが最初である。これはしかし、三七、三〇〇コンミューンからの報告にもとずいて家畜数、小麦のヘクタール当り収量および価格、種子などを取りあげているにすぎない。この調査はさらに五二年にも試みられ、以後一〇年おきに定期に行なわれることになるが、農民側からの正確な申告を期待することができず、満足な結果がえられなかった。調査官自身がやっと六二年のそれにいたって、「初めて、やや自信を以て観察の信頼性」を述べている。(註3) しかも、七二年の分は普仏戦争の影響で実施されておらず、八二年以降も大体において六二年度と同じ調査方式で、各種作物別栽培面積、ヘクタール当り収量・価格・種子量・賃金などを教えるにすぎない。

土地所有や経営規模別構成に関して知ることができるようになるのは一九世紀末までまたねばならない。土地所有に関しては、それ以前は地租課税台帳の課税対象（cotes foncières）を基にした推定でしかなく、一般にM・ド・フォーヴィルの第1表のような数学を援用することが多い。もっとも、E・ジュージィエは、(註4) 農業省によるものとして第2表のような数字をかかげているので、何らかの別の方式によ

第 1 表

M. de Foville の推定	
1789 年頃	約4,000,000
1825 年	6,500,000
1850 年	7,000,000
1875 年	8,000,000
1890 年	7,500,000ないし 8,000,000

第 2 表

	1862年	1882年
耕作地主	3,639,759	3,525,342
不耕作地主	1,413,756	1,309,904
計	5,093,515	4,835,246

第 3 表

	1882 年	1892 年
土地所有者		
自作	2,150 (千人)	2,199
自小作 小作	500	475
分益小作	147	123
日雇	727	588
非土地所有者		
小作	468	585
分益小作	194	220
日雇	753	621
定雇	1,954	1,832

第 4 表

	1892 年	1908 年
1 ヘクタール以下	2,235,405	2,087,851
10 〃	2,617,558	2,523,713
40 〃	711,118	745,862
100 〃	105,391	118,497
100 〃 以上	33,280	29,541
計		

る調査が行なわれているわけであろうが、フォーヴィル自身がやはり農業省によるとして一八八二年の土地所有者数を七、八四五、七二四として示しており、両者のくいちがいが大きい。

経営者数に関しても、少くとも一八八二年になると第3表のような統計がえられるが、(註5)経営規模別の統計となるとコンペール・モレルの掲げる第4表(註6)より古いものをえることは困難である。モレルも、「経営規模の問題はいまだかなり曖昧で、この問題に関する充分に明確な資料をわれわれはもっていない」と述べている。しかも、ピェール・カジオによると、(註7)農業経営規模に関する大きな農業調査は一八九二―一九三二年間を通じて一度も行なわれず、一九三二年になってはじめて行なわれるにすぎない。

要するに作物統計、人口統計に関しては相当古くから知ることができるが、(註8)構造的な分析、こと

に経営構造の分析をこころみようとすると、少くともフランス全国を対象にするかぎり、きわめて困難であるといわねばならない。

ところが、最近とりわけ地理学者や社会学者たちの手によって、あるいは先進農業地帯、あるいは後進農業地帯に属するいくつかの県や地域のモノグラフィが続々と公けにされつつあり、ことに北部フランスに関するものは、私の知る限りでも、三、四に止まらない。もちろん、これはあくまでそれぞれに特殊な自然と歴史をもつ個々の地域の研究であり、これらの諸労作をさらにどのような仕方で綜合していくかには慎重な態度が要求される。個々の具体的な地域の歴史がどの程度に普遍的な全体を表現しているかを真に決定するためには、さらに多くのモノグラフィが積み上げられねばならないであろう。けれども、フィリップ・ベルナールの『セーヌ・エ・マルヌ県の経済と社会学、一八五〇—一九五〇』(PHILIPP BEERNARD, Economie et Sociologie de La Seine-et-Marne, 1850—1950, Paris, 1953) は、この県のフランス農業に占める重要性から判断しても、この労作のもつすぐれた内容からみても、少くとも北部フランスに関する限り、将来の綜合の中核の一つとなると思われる。以下、現段階での一応のとりまとめという意味で、この書を中心に北部フランスのモノグラフィをまとめてみよう。

(註1)　L. DE LAVERGNE, L' économie rurale de la F rance depuis 1789, 1860
AUGÉ-LARIBÉ, L' évolution de la France agricole, 1912
H. SEE, Esquisse d'une histoire du régime agraire en Europe aux XVIIIe et XIXesiècles, 1921
COMPÈRE-MOREL, La question agraire et le socialisme en France

(註2)　遠藤輝明、「産業革命史研究の問題点」、社会経済史学　二七巻六号。

(註3)　ウェスターゴード著、森谷喜一郎訳『統計学史』、二四二頁。

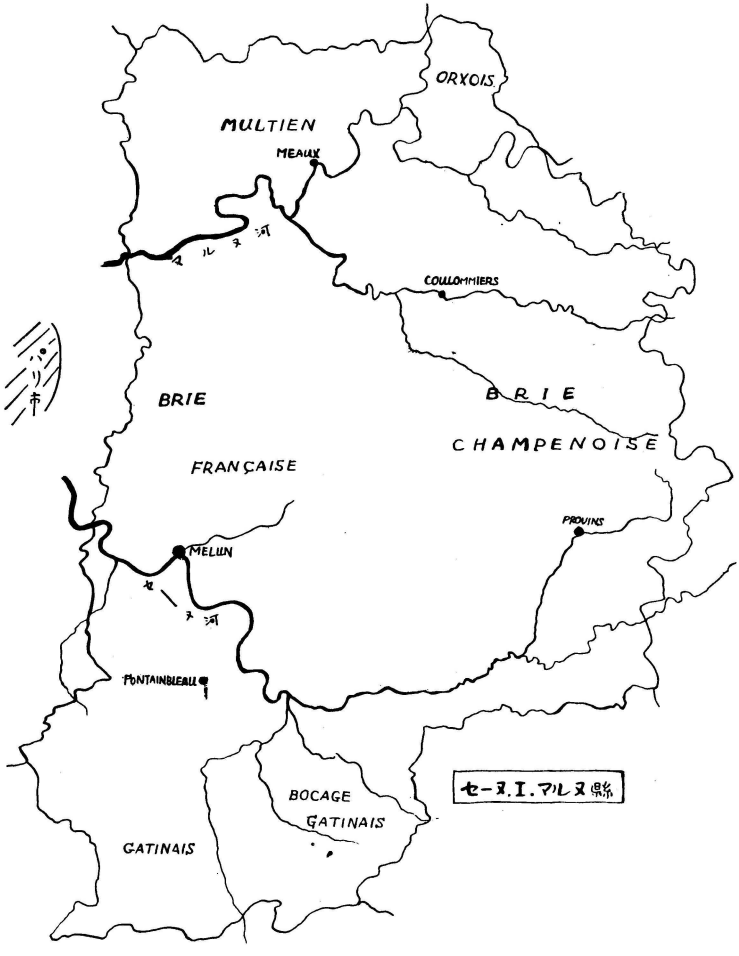
	1846	1841	1861	1872	1881	1891	1901	1911	1921	1931	1936	1946
パンにしうる穀物												
面　積	9,136	9,328	9,193	9,387	9,192	8,832	8,638	7,931	6,371	6,267	6,148	4,573
生産高	83,513	93,026	91,319	98,650	97,543	103,352	107,073	104,434	77,772	83,850	89,168	72,210
輸　入	3,115	1,436 (輸出)	4,367 (輸出)	3,659	7,419	12,207	7,670	5,352	20,245	17,950	10,157	7,000
ヘクタール当り生産、キンタル	9.14	9.97	9.93	10.5	10.6	11.7	12.40	13.69	12.2	13.38	14.5	15.79
人　口												
計	34,402	35,783	37,387	36,103	37,673	38,343	38,962	39,605	39,209	41,835	41,906	40,519
都　市	8,647	9,135	10,790	11,235	13,097	14,311	15,957	17,509	18,205	21,421	21,971	21,539
農　村	26,755	26,648	26.597	24,868	24,576	24,032	23,005	22,096	21,004	20,414	19,935	18,980
農民1人当り生産、キロ	312	349	343	396	396	430	466	472	370	410	447	362
備　考				アルザスの喪失					アルザルの獲得大戦の損失			1946年の収穫に関するだけの数字

Brasse-Brossard, Le destin de l'agriculture francaise, P. 60～65

（註4）E. Jouzier, Economie Rurale
（註5）L. Brasse-Brossard, Le destin de l'agriculture française,
（註6）モレル・前出書一七頁
（註7）Pierre Cazjot, L'exploitation et la proprieté paysanne en France,（revue d'economie sociale et rurale, 1932）
（註8）ブラス・ブロサールの『フランス農業の運命』所収の表はそれをよくまとめているので、かかげておこう。（前頁）

（二）セーヌ・エ・マルヌ県の自然と歴史

セーヌ・エ・マルヌ県はパリ盆地の一部をなす。地質学的にみると殆んど全地域が第三紀層の地磐からなり、その上にあるいは厚くあるいは薄く沖積土が推積し、その厚さが土壌の肥沃度を決定している。とくにセーヌおよびマルヌ両河の流域は厚い沖積土層からなり、きわめて肥沃である。大体の構成として東に高く西に低く、したがって県の北部をうるおすマルヌ河と中部を流れるセーヌ河は、何れも流れの方向を東から西に向けている。その結果、ごくおおざっぱに分けるとマルヌ河以北の地域の西半分をなすミュルティアン（Multien）地方、東半分のオルグゾワ（Orxois）地方、マルヌ河とセーヌ河に挾まれた地域の西半分をなすブリ・フランセーズ（Brie française）地方、東半分のブリ・シャンプノワーズ（Brie champenoise）、県南の地域の西半分のガティネ（Gatinais）、東半分のボカージュ・ガティネ（Bocage gatinais）の六部分からなると考えてよい。ミュルティアンおよびブリ・フランセーズが最も肥沃であり、とくに前者は、一八世紀末その有名な肥沃さにひかれてわざわざこの地を訪れたアーサー・ヤングが、世界で最も美事な土地であると絶讃したといわれる。これに反して県南の両ガティネ地方はきわめて痩せた土地であり、現在なお


ORXOIS
MULTIEN
MEAUX
マルヌ河
COULOMMIERS
パリ市
BRIE
FRANÇAISE
BRIE
CHAMPENOISE
PROVINS
MELUN
セーヌ河
FONTAINBLEAU
BOCAGE
GATINAIS
GATINAIS
セーヌ.エ.マルヌ県

殆んど森に掩われており、水に恵まれない砂質の土壌であるために耕作には適しない。

今日セーヌ・エ・マルヌ県に属するこうした諸地域は、昔は南北に走る境界線によって東西に分かたれ、シャンパーニュ（東）とイル・ド・フランス（西）という二つの州に分属していた。マルヌ河とセーヌ河に挾まれたブリ地方がブリ・フランセーズとブリ・シャンプノワーズに分れているのはその名残りである。大革命は旧制度下の行政区劃である七つのエレクシオンを合せて現在のセーヌ・エ・マルヌ県を作り、その県庁所在地をセーヌ河沿いのムラン（Melun）に定めた。当時ムランよりもマルヌ河沿いのモオ（Meaux）のほうが大きかったが、司教所在地としてのムランが選ばれたのである。けれども、この県の真の首都はムランでもモオでもなく、実際はすぐ近接するパリであると云える。なにしろ、パリの中心にあるノートル・ダム寺院まで県境から僅かに五里しか距っていないからである。もともと東から西へとパリにむかって流れているセーヌおよびマルヌの両河は云うまでもなく、鉄道・道路などの一切がパリにむかっている。県の南北を結ぶ鉄道はなく、僅かに二級の道路があるにすぎない。

土壌の性質は、県南の軽い土壌のガティネ地方を別にすると、一般に肥沃ではあるが重い粘土質である。それはその不滲透性のためにこの地方の多くを過度に湿潤にし、多大の費用を要する排水工事によって改良されねばならなかった。また、土壌の重さは強力な繋駕を必要とし、石灰分の不足は泥灰石の投与を不可缺にした。そのために、一九世紀の中頃、単位面積当りの必要経営資本量において、ブリ地方は県南のボース地方の二倍、シャンパーニュ地方の四倍を必要にしたと云われている。これがこの県の農業を他地方にくらべてヨリ早くヨリ完全に《資本家的》にした大きな理由である。なぜなら、大きな資本を投下して排水工事をすませさえすれば土壌の肥沃度そのものはきわめて大であり、高い収穫を持続的にあげることが可能だからである。こうした土地改良事業の有利さはその工事費を二、三回の収穫で

充分に取戻せると云われたことから明らかであろう。

工事のやり方は、古くは畝や溝を作って余分の水を水溜や泥池に導くというやり方だったが、一八四六年頃から、すでにイギリスでおこなわれていた排水管による方式が用いられるようになった。一八七八年までに約一万二千ヘクタールに工事が施されたが、その殆んどが大経営の土地であった。工事はこの後も行なわれるが、次第に個人の手から組合の事業に移っていった。最初の排水事業組合は一八九七年にできる。二〇世紀に入ってからは県の農業土木部が協力するようになった。これによる工事面積は一九三七年までに約一万五千ヘクタール。総計、この年までの工事済み面積は約五万ヘクタールであり、これはブリ地方の農地面積の1/4ないし1/5にあたる。排水工事の最も完成しているのはとりわけブリ・フランセーズであり、現在殆んど全地域が工事済みである。その他の地域ではまだまだ不充分であり、総じて大農地域では完成し、中小農地域では遅れていると云える。

なお、この県がフランスの最も《資本家的》な県の一つと云われる根拠を一、二の指標によって示しておくと、この県の耕地一ヘクタール当りトラクターおよび刈取・打穀機台数は全国一であり、耕地一ヘクタール当り肥料の消費量は一〇ないし二〇番目である。

(三) 工業の歴史

農業の歴史をたどる前に工業のそれをみておくことにしよう。両者はあるいは生産物の面で、あるいは労働力の面できわめて密接な関係にあるからである。

工業の歴史はベルナールのいわゆる「歴史的工業」と「現代的工業」にわかれる。まず前者についてみると、一八世

紀末から一九世紀中頃にかけて栄えた織物業がある。たとえばムランには、一七九〇年と一八〇三年に木綿紡績および織物の工場が創建され、最盛期の一八一七年にはそれぞれ六六〇人と三三五人の労働者がいた。製品の半分以上が輸出である。けれどもこの隆盛はナポレオン戦争下の特殊事情によること大きく、平和の到来とともにイギリスの競争に敗れ、三五年頃姿を消す。その他着色亜麻布のいくつかのマニュファクチュアがあり、一八世紀末から一九世紀初めにかけて、あるいは四百人、あるいは百人の労働者をかかえていた。また小規模の製糸工場、綿や毛の織物工場もあった。けれども麻織物工場の一部が今日まで存続しているほかは、その大部分が一九世紀中に没落してしまう。同じ事情が帝政末期に数万の労働者をようしていたパリの織物業にもみられるが、その理由は何であろうか。北フランスの他の地方の織物業の場合にはそうした事情はみられず、当時の人々の理解によると、パリに近いためにおこる労働力の高価と不足がその原因であった。

「歴史的工業」には、このほか、原料に恵まれた古くからの工業である製陶業・製紙業などのマニュファクチュアが目立つ。前者は、たとえば一七一九年創立のモントロオのそれについてみると、一八一〇年に二二〇人、四四年に四六二人、九六年に七二〇人と一九世紀を通じて規模を拡大している。今日なお八百人の労働力をもつ工場がある。水車を利用して一八世紀末におこった製紙工場の多くは労働者百人程度であるが、製陶業の場合と同じように今日なお存続している。このほか、ガラス工場、チョコレート工場、製鉄所、なめし皮工場、石切出し業、粘土坑などがあったが、その大部分が一九世紀中に没落してしまう。

一九世紀末、すなわち一八八〇—九〇年以後になって急速に発達した「現代的工業」は三つの種類に大別される。製糖工場を中心とする各種農村工業、河谷地帯に設けられた金属および化学の大工場群、その他各種の軽工業がそれで

ある。

甜菜から砂糖を抽出する方法の発見は古く第一帝政下にさかのぼるが、製糖業が今日のように発達したのは七五―八〇年頃以後である。この産業は輸入糖の競争によって長く不安定な状態を続け、関税によって保護されねばならなかった。そのため政治による影響を強くうけた。その上、操業期間が一般に一〇月下旬から一月下旬までの三ヵ月に限られており、労働力調達の面で特殊問題をかかえている。すなわち右の三ヵ月間に三百人とか六百人とかを雇傭する工場も、それ以外の季節には五〇人から一〇〇人程度をしか必要としない。こうした繁忙時の労働力は、最初は近傍農村の麦の収穫後の閑暇労働力で充分であったが、規模の拡大につれてそれでは充足できなくなり、遠くから季節労働者を呼びよせるための組織が必要になった。

甜菜の汁を利用する工業にはこのほか酒造用アルコールの蒸溜がある。この工業の発達はさらに新らしく、一部は第二帝政期に始まるが、大部分は第一次大戦以後、とくに一九三〇年以後である。（セーヌ・エ・マルヌ県はフランスの県の中で甜菜栽培で第五位、甜菜アルコールの生産で第三位）。また、農村工業としてはほかに馬鈴薯や雑穀を原料とする澱粉工場若干、製粉工場一、チーズや乳製品工場若干がある。

金属加工、化学の機械制大工場の出現は最近五〇年のことだが、金属加工業はそれだけで一万人の労働者を雇傭する。これらの工場は全部がセーヌ河流域に集中しているが、その多くは、その建設以前には単なる村落にすぎなかった村々を急激に都市化した。

その他の工業とは、新らしいセメント工業のほかは、製陶業・製紙業・ガラス工業など、古くからの工業で現在なお存続している諸工業である。

職業別人口の変化を大観すると次の第5表の如くである。

なお、五〇人以上の労働者を雇傭する工場数について簡単にみておくと、一九世紀初期に約一二、一八八五年に一九であったが、一九四七年には八二である。

第 5 表

	1881	1896	1911	1946
農業	78,455	—	70,304	55,417
工業および運輸	38,333 (註)	56,599	70,260	79,531
商業			18,241	23,940
自由業（公共サービス）			11,349	18,274
サービス業、家事使用人			10,228	9,451
計		154,949	180,480	186,613

註　運輸を含まない。この年の運輸労働者は約4,000人

（四）土地の種別と作物の構成

土地の配分は、統計をうっかり読むと一九世紀の中頃以後大きくは変っていないかの如くである。なぜなら、一九二九年のそれと一八四一年のそれは殆んど同じ構成だからである。けれども、事実は、一九世紀の末頃までの耕地面積の増加、それ以後の減少という、二つの相反する方向の運動によって相殺されているにすぎない。(註1) いま、一九世紀末以後の変化をたどってみると、耕地面積は一八九二年の四一三（千ヘクタール）から一九四四年の三一三と大幅に減少し、逆に牧草地は前者の二九・五から後者の三六と増加している。森林面積および非耕作地の増加も著しい。こうした傾向は最近他の諸県でもみられるが、とくにこの県において、一八世紀における森林・荒蕪地の増加、一九世紀における耕地の増加、二〇世紀になって再び森林・荒蕪地の増加、という現象がはっきりしている。

次に作物構成の変化についてみると、穀類は一九世紀を通じて増加していたが世紀末頃から停滞し、最近はむしろ減少傾向にある。これに対して製糖・酒造・飼料

用の各種甜菜、および馬鈴薯の増加が著しい。

なお、甜菜について少し立ち入って述べておくと、この作物、ことに製糖および酒造用甜菜の栽培は県内の一部に著しく集中しており、決して全県に分布しているわけではない。なぜなら、甜菜の栽培は最も高い粗収入を保証すると同時に最も多くの労働（鋤き返し、間引き、収穫）、肥料、深耕を必要とし、肥えた土地に多くの資本を投じてのみ可能だからである。他面それは、それ自体が大きな収益をもたらすだけでなく次期作の麦の収量をも高め、資本家的経営にきわめて適合している。また、ヘクタール当り収穫が三〇ないし四〇トンにもなり、収穫の時の天気次第では運搬に苦労する。なにしろ雨のときにはほぼ同量の土が付着するからである。そのため集荷のための狭軌鉄道が畑の間に四通八達しておらねばならぬ。場合によっては製糖所の周辺にいくつもの甜菜擦砕工場を設け、そこから地下パイプで汁だけを輸送する設備が必要である。県のモデルとされているヴィルノワ・モオの製糖所は擦砕所を一二カ所ももっているほどである。

大麻・亜麻などの繊維作物、なたね・けし・油菜などの搾油作物は減少傾向にある。大麻は全く姿を消し、搾油作物も一九世紀半ばには五千ヘクタールだったが今日では殆んど栽培されない。僅かに亜麻だけが一九四〇―四四年の数字で平均二千ヘクタールである。

家畜の飼育はこの県では大きな地位をもっていない。自然および人工牧場は土地の約一七％（一九二九年）しか占めていない。同じ年フランス全体の平均は二七％である。家畜の殆んどは牛と羊であるが、仔牛の殆んどが県外（主としてモルヴァン地方）からの購入による。それをパリ市場向けの食肉および牛乳用として飼うわけである。羊は現在なお頭数としては最も多いが、前世紀にくらべると減少が著しい。なお、第二次大戦後若干家畜飼育が増加の傾向にある。

（註1）　数字的には明らかにされていない。

（五）土　地　所　有

旧制度末期に、この県の土地のかなり重要な部分が教会に属していた。たとえば、ヌムール・エレクシオンで僧侶の土地は約九％であったがフランス全体の平均は六％である。貴族の所有地はこの頃になるとあまり大きくなかったようである。他方、小土地所有農民の数はすでにきわめて大きかった。

今日、土地所有は一見するときわめて細分されているかのような印象をうける。一九二九年の調査によると、土地所有者数が一三万八千余人、土地面積が五一万八千ヘクタールであり、一人当り三・七ヘクタールにしか当らないからである。けれどもこれは平均であって、云うまでもなく大土地所有の存在を否定するものではない。たとえば一八七四年には、百ヘクタール以上のコート[註1]八六六だけで全体の三分の一近くを占めていた。土地所有の構造を数量的につかむ方法は前にみたように右のコート・フォンシェールによるほかはないが、その変化は次のように算出されている。

一八七四年……二一五、五三九
一九二七年……一七四、八〇〇
一九四六年……一九九、九四〇

なお、県の土地台帳局は、県内の先進農業地帯ブリ地方については次のような進化を推定している。

	一八四六年	一九二九年
小土地所有（一―一〇ヘクタール）	三五％	一五％

中 〃	（一〇―一〇〇ヘクタール）	四〇％	四〇％
大 〃	（一〇〇ヘクタール以上）	二五％	四五％

もう一つの先進地帯ミュルティアン地方についても同じ動向が証明されているが、南部の後進地帯ガティネの場合には大小の土地所有を犠牲にして中土地所有の発達がみられるという。また、大土地所有の大部分（六五―七〇％）が県外、すなわちパリの地主たちに属していることに留意の必要があろう。一八八〇年に公刊されたドニイ司祭の『セーヌ・エ・マルヌ県農業史』[註2]は、「きわめて普及している見解に反して、小土地所有は大革命以前のブリ地方において支配的であった。大土地所有はこの小土地所有を犠牲にして少しづつ形成されたのであって、これはパリに近接しているという理由によって説明のできる現象である、」と述べている。

この県における封建制は、前にみたように、もともと他地方より早期かつ完全に消滅しており、一八世紀になると「地方的貴族階級の痕跡を殆んど見出せない」[註3]位であった。これはこの地方が古くから王領であったことによることが大きい。けれども、ドニイ司祭の云うようにパリに近いことが大領主やブルジョワたちの土地購買欲をそそり、新らしい大土地所有の形成を促進した。そして、こうした動きはすでに大革命以前からみられたのだが、一九世紀になってますます激化した。

かくして、他の地方では次第に衰退していった大土地所有がこの県では新たに構成されていったわけであるが、あくまで「封建制の外部」で形成され、封建的な性格の薄いことが特色である。この県の土地を所有する貴族階級は「伝統的な諸地方の貴族階級とはかなり異っていた」[註4]と云われる。有名な大地主としては、たとえば、スタール夫人の自由主義的傾向を相続したオウゾンヴィル家、ラファイエットの伝統を誇るラファイエット家、古くからの貴族ムースティエ

家、セギュール家、金融貴族であるグレフュール伯爵家、ロスチァイルド家、ペレール家、カーアン・ダンヴェル家、銀行家であるオッタンゲル家、エシュタル家などがある。

そして、その所有地は、狩猟や娯楽のための森林やパークと、小作人に貸付けた耕地からなりたっていた。領主の中にはその所領を自ら経営するもの（例えば、一八四八年にツールナンの近くに農場をもっていたラ・ロシュフーコオ＝ドウドオヴィルや、その義兄弟で同じく農場をもっていたマッコオ男爵）もあり、しばしば彼らは新しい農業技術の導入者の役割をつとめた。

また、当然のこととして、政治面における彼らの果した役割は大きく、第二共和国、第二帝政、および第三共和国の代議士の殆んどは彼ら貴族層によって占められていた。一八七一年においてさえ、貴族はこの県の代議士の大部分（七人のうち四人）を占めていた。当時これに比較しうるような県は僅かしかない。けれども、一八八五年に急進的階層が勝利するようになって、やっと情勢が変ってくる。

（註1）第一章「まえがき」の説明を参照のこと。
（註2）L'ABBE DENIS, Histoire de l'agriculture en Seine-et Marne, Meaux, 1880. ベルナールの引用による。
（註3）ベルナール・前出書　一六九頁
（註4）ベルナール・前出書・一七〇頁

（六）経営規模別構成

（I）

一九四二年の農業調査によると、この県はフランスの県の中で最も経営の集中の進んだ県である。この県の平均経営

規模四八・七三ヘクタールという数字は隣りのオワズ県の四四・〇一ヘクタールをはるかに上廻って全国一である。また、一〇〇ヘクタール以上の経営の占める面積が全耕地の半分を占める県は他にはブーシュ・デュ・ノール県があるだけである。同じ年、フランス全体では、基準点を三〇ヘクタール以上にまで引き下げても四四％でしかない。

もちろん、経営の集中はこの県の全部に同じ程度にあらわれているわけではない。北部と西部が進み、南部と東部が遅れていることはすでに述べておいた。さらに、この北部と西部、つまりこの県の二大先進地帯であるミュルティアン地方とブリ・フランセーズ地方の間にも、その集中の性格と時期の点でちがいが認められる。いま基準を一〇〇ヘクタール以上の経営の占める面積の％におくと、両者の中でもブリ・フランセーズが大きい。この地方の中でも、とりわけブリ・コント・ロベールとモルマンの二小郡（カントン）の如き、一九四二年に、それぞれ八五％と八六％に達していた。けれども基準を二〇〇ヘクタール以上の極大経営に引き上げると、逆に少しばかりミュルティアン地方のほうが進んでいる。

経営の変化を歴史的にあとずけることはきわめて困難であるが、対象を大農場だけに限定すれば、一九世紀の初期の史料さえ残されている。すなわち、県史料庫所蔵の『革命第十年における農場数および家畜数調査』[註1]（一八〇四―一八一〇年）がそれである。これは「農場（フェルム）」、つまりある程度以上の規模の経営についてだけその「鋤数」を調査し、郡単位ないしコンミューン単位で集計したものである。このいわゆる「鋤数」とは、一鋤でもって耕すことのできる面積のことであって、鋤そのものの数ではない。その大きさは一応四四―四五ヘクタールとされているが、たとえば三六ヘクタールと考えている郡もあれば一五ヘクタールとみる郡もあり、現実には大幅にちがっていた。そのため、むしろ平均三〇―三五ヘクタールとみるほうが妥当とされている。[註2]つまり、三鋤の経営がほぼ一〇〇ヘクタールの経営に見合う。そこで、この一八一〇年の調査を基準に、それと比較できるような形でそれ以後の年次の統計をまとめてみたのが第6

第 6 表

郡名	1810年の農場数		100ヘクタール以上の経営数		
	三鋤以上	四鋤以上	1892年	1929年	1942年
クーロミエル	109	13		144	162
フォンテンブロー	44	3		104	102
モオ	266	120		272	297
ムラン	141	51		297	260
プロヴァン	145	25		292	300
全県	705	212	1,026	1,109	1,126

表である。ただ、厳密に共通の基準で並べることは不可能であり、たとえば一九二九年と四二年の両統計の間には、前者が総面積によって後者が利用面積によって経営を区別しているようなちがいがある。したがって、四二年の数字と二九年のそれを比較する場合、前者を少し水増ししておかねばならない。

さて、それだけの考慮をはらって表をみると、今日もまた先進地帯である北西部のモオ郡、すなわちミュルティアン地方が、一八一〇年においても最も多くの大農場をもつ地方であったことがわかる。（一〇〇ヘクタール以上の農場数三八六）。もう一つの先進地帯である中西部のムラン郡、すなわちブリ・フランセーズと、中東部のプロヴァン郡の大農場数は一八一〇年には前者に比較して相当少い。（それぞれ一九二と一七〇）。けれども一九二九年になると逆に前者を上廻る。（それぞれ、二七二、二九七、二九二）。つまり、後の二者の一九世紀中における発達の速度はきわめて大きかったわけである。そしてわれわれは、ここで第二章でみた土地改良事業の問題、とりわけそれがブリ・フランセーズを中心にするものであったことを想い起すべきである。これに反して、北東部のクーロミエル郡のもつ大農場数は最初は前二者にそれほどの差がないが、一九世紀中での発達があまりないので、現状では大幅に遅れてしまっている。南部のフオンテンブロオ郡にいたっては、初めから終りまで一貫してきわめて低いところにとどまっている。

もっとも、以上は一〇〇ヘクタール以上の経営に基準をおいての分析でしかなく、基準をかえれば異った動きが浮びあがる可能性はある。たとえば、ムラン郡の中でも集中の激しい前出のブリ・コント・ロベール小郡についてみると、この小郡とムラン・ノール小郡とにおける一〇〇ヘクタール以上の経営数は一八二六年に七二、一九四六年に七六とあまり変化がない。ところが、一八一〇年における六鋤（二〇〇ヘクタール）以上の農場数はムラン郡全体で僅かに三でしかなかったのに、一九二六年には、右のブリ・コント・ロベール小郡とモルマン小郡とでその数六七をかぞえた。つまり、基準をかえることによってはじめて激しい集中が検証されるわけである。

また、こうした大ないし極大の経営の動向とは別に中小の経営の動きこそ最も知りたいところである。けれども、それを統計的につかむことはできない。前に述べたように古い統計はただ《農場》数だけしか調査していないからである。ただ、小経営の占める面積が、したがってまた経営数がかなり大きかったにちがいないということは、たとえば北東部のクーロミエル郡で《農場》群の占める面積が計一、〇一六鋤に対して小経営のそれが三五〇鋤と示されている事実によって明らかである。中東部のプロヴァン郡では、《農場》群は総面積八四、〇〇〇ヘクタール中四九・三二〇ヘクタールしか占めていなかった。残りは《マヌーブリエ》と呼ばれる零細農によって占められていた。先進地帯であるモオおよびムランの両郡については不幸にも同種の資料が残っていないが、ムラン郡に含まれる前出ブリ・コント・ロベール小郡とモルマン小郡については、一八五二年の調査が一、四九〇人という小農民数を記録している。総じて、「農業人口の最も大きな部分は、昔は、あるときは独立的な、あるときは大借地農業者に雇われる、《マヌーブリエ》たちによって構成されていたのであって、一八九二年の調査は、この県の場合、日雇として働らく九、〇六三人の小土地所有者を数えている。そしてこれは、一九世紀の中葉においてはもっと多数であったはずである」[註3]、とベルナールは述べ

第 7 表

経営規模（ヘクタール）	1882	1892	1929	1942	1946	1948
1 ～ 10	21,936	22,244	4,410	1,595	1,133	1,966
10 ～ 50	7,153	5,715	4,846	3,786	5,599	3,770
50 ～ 100		780	1,038	1,080		1,900
100 ～ 200		731	784	807		
200 以上		295	325	319		317
計	29,099	35,480	11,403	7,587	6,732	7,636

ている。

第三共和国時代になると、ようやく《農業者》と《マヌーブリエ》の区別ではなくていくつかの経営規模別に農家を分類するようになってくる。ところがこの《農家》の定義がきわめて曖昧であるので、とりわけ一ヘクタール以下の零細経営数は調査年次によって大幅にちがってくる。古い統計では広義であり、新しい統計では狭義である。そこで、そうした難点を最も多く含んでいる一ヘクタール以下の経営数を思いきって除外してしまい、その上でできるだけ共通の比較ができるようにまとめたのが第7表である。これはそれぞれ調査主体と調査方法を異にする諸統計(註4)を拾い集めたものでしかないので、厳密な比較は慎しまねばならない。例えば経営面積が年次によって総面積でとらえられていたり利用面積でとらえられていたりしている。けれども、そうした考慮の上で表を検討すると、それでもなお大体の動向をつかむことは許されるであろう。以下、それを要約すると次のようになろう。

(一) 一九世紀末までは一〇ヘクタールまでの小経営は増加し、したがって農家総数は増加している。

(二) 二〇世紀に入るとともに、一〇ヘクタール以下の小経営は勿論として、一〇―五〇ヘクタールの中経営までが減り始め、したがって農家総数は激減する。

(三) それとは逆に、この頃から五〇ヘクタール以上の大きい経営が増加する。

(四) ただし、二〇〇ヘクタール以上の極大経営は殆んど変化がなく、むしろ減少傾向である。

(註1) Recensement des fermes et des animaux en l'an X (1804—1810)

(註2) ベルナール、前出書　四三頁

(註3) ベルナール・前出書　六六頁

(註4) 一八八二年と九二年は Enquête décennale. 一九二九年は Enquête agricole. 一九四二年は Enquête I. N. S. E. E. 一九四六年は不明、一九四九年は F'édération départementale des syndicats d'exploitants agricols. いずれもベルナールの著書からの引用。

(II)

以上の全県的な統計分析は、さらに地方的な諸統計や資料によってもう少し深めることができる。ことに右においては全く空白なままに放置されていた一九世紀の前・中期の状況をできるだけ明らかにすることが必要である。

まず大経営についてみると、それが相当に古くから存在していたことは、ごく稀だが幸いにも残された各種の資料によって立証される。集中運動は、少くとも先進地帯では、すでに大革命以前に始まっていたようである。たとえば、現在は隣りのオワズ県に属するがもともとミュルティアン地方の一部をなすヴァロワ地方において、激しい集中運動が一八世紀中に生じた。(註1) すなわち、この地方に位置するクレピイ・アン・ヴァロワ・エレクシオンで、一七二八年から六二年にかけて、隣接する四三の農場が合体された。また、ミュルティアン地方の他の村落のモノグラフィは現在は畑になっている場所に昔は多くの建物のあったことを教えるし、老人たちの証言が大経営の古さを物語ってくれることもある。ミュルティアンおよびブリ両地方では、大農場の建物自体がその古さによって歴史を語っているとも云える。

ミュルティアン地方のある村では、一八一〇年の調査のとき、一つは二鋤、他の一つは五鋤の二つの農場があり、そ

のほかに疑いもなく多数の独立的な「マヌーブリエ耕作者」がいた。ところが一九世紀中にこの二つの農場は合体したし、多数の小農民たちは姿を消していった。最後の小農民が経営を放棄したのは一八九七年である。この年以後この村の耕地約四〇〇ヘクタールは唯一つの経営によって耕やかされることになる。

同じ地方のもう一つの村には、一八一〇年に四鋤と五鋤の二つの農場があった。一九一一年以前には逆に三つに増えていたが、この年再び二つに戻った。このほか小農民が四人いたが、その全部が一九〇九年までに姿を消す。この事例の場合、農場数は一九世紀の過程で増加している。

集中がずっと最近になって行なわれた場合もある。この例はやはりミュルティアン地方のあるコンミューンの場合であり、ここには一九一三年以前に一〇〇ヘクタールないしそれを若干上廻る二ないし三の農場と約一〇の小経営が存在した。ところが一九五〇年には一つの極大経営（五五〇ヘクタール）と二〇ないし五〇ヘクタールの六つの中小経営しか存在しなくなった。さらにこれらの中小経営群も一九四五年までにその極大経営に吸収されつくす。この村の場合、なぜこのように集中が遅れたかはその地形と土質による。ミュルティアン地方を横切る砂質の小丘上に位置するこの村の土地は平原部に位置する前出の諸コンミューンより肥沃度が劣り、場所によっては粘土が露出していた。けれども、新らしい耕作方法が昔に較べてこうした土地を巧みに利用することを可能にするようになるとともに、ただ単に集中が始っただけでなく、その激しさにおいて他の地方をしのぐ結果をもたらした。

ブリ・フランセーズ地方でもまた集中は優良地でまず現われたことが証明されている。けれども、ここでの資料は十九世紀前半の経営の動きをもっとはっきり証拠だてる。例えば、キエルには、一八一〇年の調査のとき、三鋤の農場二つを含む六農場があった。これが一八五二年の調査では一三農場に増え、そのうち五つが一〇〇ヘクタール以上であっ

た。この村には、当時、自分の土地だけを耕す二五人の自作農と、自分の土地のほか他人に雇われもする三六人の日雇農がいた。蒐集された証言によると、農場数は一八九六年には一二に減り、さらに一九四六年には四経営に、一九五〇年には三経営に減る。もっとも、一九四六年の別の統計は、一〇〇―二〇〇ヘクタールの経営四四、一〇―五〇ヘクタールの経営四と記録しているので、少くとも一九四六年までは前述の四経営のほかに四つの農民経営が残っていたことになる。また、レオウでは、一八一〇年の統計は一〇農場と教えているが一八五二年にも同じく一〇であり、そのうち六農場が一〇〇ヘクタール以上であり、そのほかに自分の土地を耕すかたわら他人に雇われる六五人の日雇農がいた。それが一九四六年の統計になるともはや七経営しか示されず、その全部が一〇〇ヘクタール以上であり、僅かに一つだけが一ないし二ヘクタールの零細経営である。七つのうち四つは二〇〇ヘクタール以上の大経営である。

マルヌ河およびセーヌ河のつくる平坦な沖積土平原である右のミュルティアン地方およびブリ・フランセーズの二大先進農業地帯以外でも、集中はやはり進んでいる。例えば県の北東部に位置するオート・ブリ地方の丘陵地帯に関する研究(註2)の教えるものがそうである。ここでは、沖積土層が厚くかつ平坦な東部とその層が薄い上に諸河谷によって寸断されている西部との間に、明白なちがいがあり、前者では大経営が後者では小経営が支配的だったが、最近数年間の動きは、その後進的な西部においてさえも経営の集中と農民の離村が激化した。その他、県の東部地方に関する研究をみても、総じて肥沃度の劣る地方における経営の集中化現象は、ごく最近になってあらわれているようである。

もちろん、このように断片的な証言の集積からこの県の農業構造の変化に関するあまりに精密な結論は導き出せないし、ことに一九世紀の前・中期に関してはとりわけそうである。ただ、一八六一年迄は県全体として明らかに農村人口が増加し続けているし、農家戸数もまたおそらくは増加していたとは考えてよいであろう。少くとも、ベルナールの云

うように、増加するにしても減少するにしても「運動がきわめて兇暴な形で進行していたとは思われない」。休閑地の消滅が耕作面積、したがってまた農家戸数の増加を助長したし、穀物価格もまた高水準を維持した。要するに、第二帝政期までは、「全体としてみると小経営に好意的な時代であったように思える」。(註3)

これに反して、一九世紀の最後の四半期になると、県内のすべての地方において集中化現象が明白に感じられてくる。これには、七五年頃から明確化するいわゆる一九世紀末農業恐慌が大きく影響していることは否定できない。機械化によるアメリカ産麦と飢餓販売されるアジア産麦が東西からヨーロッパ農業を挟みうちにしたのである。農業恐慌の原因調査委員会によって作成されたセーヌ・エ・マルヌ県の農業情勢報告書（一八八五年）は、《細分化の停止》を一つの新らしい現象として指摘している。これによると、恐慌によって土地の賃貸価格は激しく下落しており、ことにそれは小規模農場において甚しい。それはしばしば五〇％をこえており、多くの小農民が経営を放棄した。要するに、この報告書によれば《細分化》はここにおいて《停止》するわけであり、裏返して云えばこの時期までは進行していたのである。そして、ここで問題なのは、一方において前にみたように経営の集中化が立証されているその同じ時期に、他方においてこのように全体としての《細分化》が進行していたという事実である。集中化と細分化というこの相反する二つの現象のいずれもが否定しえない以上、それを矛盾なく説明するための努力がつくされねばならない。

たとえば、統計の上で同じように一〇〇ヘクタール以上の大経営としてとらえられているものに新旧異なった型の経営を想定することは許されないであろうか。この節の最初にみた北東部のクーロミエル郡の事例などはそうした想定にふさわしい動きを示しているように思える。すなわち、この郡の大農場数は一八一〇年にすでに一二二を教えたが一九二九年のその数は一四四でしかなく、一九四二年になってやっと一六二をしか数えない。ところが先進地帯のムラン郡

の場合には、一八一〇年のそれが右のクーロミエル郡と大した距たりのない一九二であったのに、一九二九年には二九七もの多数を記録している。この場合、後進地帯であるクーロミエル郡の一九世紀初期の大農場の中に古い型の大農場が存在したと仮定することが認められるなら、一方におけるこうした型の大農場の解体、その結果としての多数の小農民経営の形成、他方における資本家的農場の漸次的成長、両者の相殺による大農場数の不変、総戸数の増加という現象が生じることが可能である。また、同じような相殺を先進地帯と後進地帯との間にも考えることができる。けれども、これはあくまで仮定の域を脱せず、それを統計や資料によって立証することは現在のところ望みえない。

（註1）　Prieur d'Andresy, Histoire du Valois, 1764

（註2）　Me Pingaud, Etude agricole du plateau de la Haute-Brie de l'Ouest, 1950

（註3）　ベルナール・前出書　六一頁

（七）自小作別構成

セーヌ・エ・マルヌ県では今日では小作制が支配的である。ことに大経営の場合にそうである。けれども、小経営の場合には自作農の占める比重が小さくないし、ことに一九世紀末まではそうであった。分益小作制や管理人による経営はあまり発達していない。自小作別農家戸数および耕地面積の変化は、「農業統計」によった場合次の第8表の如くである。

ところが、この表もまた各年次の間に調査方法のちがいがあり、厳密な比較を許さない。たとえば一八九二年の分には一ヘクタール以下の零細経営が含まれているが他のものでは除外されている。また、一八九二年の場合、自作と小作

第 8 表

年次	農家戸数 実数 自作	農家戸数 実数 小作	農家戸数 % 自作	農家戸数 % 小作	面積 % 自作	面積 % 小作	平均経営面積（ヘクタール） 自作	平均経営面積（ヘクタール） 小作
1892	41,863	12,733	76	24	43	57	4.7	20.4
1929	11,393	5,692	67	33	30	70	13.9	65.2
1946	2,713	3,772	43	57	—	—	—	—

第 9 表

	自作	小作	その他
1876	14,481	4,663	10,772
1881	14,572	4,347	9,801
1946	6,133	1,670	1,572

の分類基準が曖昧であり、自作兼小作を自作および小作の双方に加えているようである。両者の合計が総戸数を上廻っているからである。さらに、「人口統計」による第9表とも大幅に喰いちがっている。わずらわしいので立ち入った説明を省くが、この「人口統計」がまた厄介で、第9表の「その他」がまた各年次によってちがう。大体は農業労働者を中心にしたものではあるが。

このように統計そのものが著しく不完全なものであるから、年次別の変化を云々することは精密にはできないが、大体の動向をつかむことはできよう。すなわち——

(イ) 一九世紀末までは、戸数において七割近く、経営面積においても四割近くが自作であった、

(ロ) そうした割合は二〇世紀においては逆転するし、ことに最近における変化が著しい、

などがその主要な点であろう。

けれども、フランスの他の地方、たとえば東部地方、アルプス地方、中部丘陵地帯、ブルターニュ地方、バス・ノルマンディ地方、アキテーヌ地方、等々、総じて

山間部の後進地方では自作が増加する傾向にあるとのことであるから、この結論を性急に一般化することは厳重に慎しむべきであろう。あるいは、前章で設定した仮定がここでもまた可能であるのかも知れない。すなわち、後進地域における古い型の大土地所有の崩壊、小規模の自作および小作の増加、その資本主義的分解、資本家的借地農業者と農業労働者階級の形成がその基本的なプロセスである。

(八) 大規模経営の周辺

農業労働者数を正確に把握することは著しく困難である。工業労働者の場合のように定期的かつ詳細な調査が行なわれていないからである。けれども、ここでもまた二種類の資料、すなわち「農業調査」と「人口調査」を利用して大まかな把握は可能である。まず、「農業調査」による農業賃金労働者(季節労働者は除外)をみれば第10表の如くであり、「人口調査」によるものが第11表である。

以上の二表に共通して、一九世紀末を境界に恒常的な労働者の増加と不規則就業の日雇労働者の減少が明白である。その結果、一九世紀末までは後者のほうがやや多かったのに今日では逆に前者の六分の一程度という状態である。これは全く、すでにみた一九世紀末における小規模経営の没落、資本家的経営の増加という現象に相通ずる現象であって、いわば当然に予測される事柄である。

ところで、こうした恒常的労働者、すなわち言葉通りの農業プロレタリア階級の形成以前に、大中の経営群はいかにしてその労働力を調達していたか。右の表にいわゆる「日雇い」階層の実態はどうであり、その大経営との結びつきはどのように行なわれていたかについて簡単に述べておこう。

第 10 表

	1892	1929	1946
労働者および常雇い	15,148	19,095	19,674
日　雇　い	17,591	10,899	

第 11 表

	労働者および常雇	日　雇　い	計
1876	21,653	23,919	45,572
1881	—	—	43,167
1891	—	—	46,105
1906	27,887	16,042	44,329
1911	—	—	37,032
1921	28,184	14,540	42,774
1931	27,439	2,242	29,677
1936	24,729	6,958	31,687
1946	31,645	5,019	36,664

註）1881年と1891年の間に調査方法の変更がある。
1846年の数字は戦時下の食料配給のために水増しあり。

これは、具体的には、前にみた「マヌーブリエ」である。「マヌーブリエ」とは、ベルナールによれば、「殆んど常に精々数ヘクタール、あるいはしばしばそれ以下の土地しか所有しないが、一般に少くともその家を所有しており、その時間の全部ないし一部を、牧夫、鋤夫、農場娘、牛やニワトリの番をする子供、として大農場に雇われる」農民たちのことであり、冬期には、木樵りをしたり、工場で働いたり、その他雑仕事に従事したりする。一九世紀には、数の上ではこの階級が最も多かった。大規模経営の支配的な地方を含めて、県内の土地の四分の一以上が彼らによって占有されていたと見積られている。(註1)

この「マヌーブリエ」階層のやや上位に、この地方の用語で「ブリコリエ」と呼ばれる農民たちがいた。これは精々数十ヘクタールの土地を自作ないし小作する農民であり、先進地帯では今日で

は僅かな数しか存在しないが、かっては相当に多数であった。この「ブリコリエ」(bricoliers) という言葉のもとになっているブリコロル (bricolors) という言葉は、「脇馬」、「追加された曳馬」、あるいは「あらゆる仕事に手を出す人」の意味であり、彼ら「脇馬」たちの協力によってはじめて大経営の運営は可能であった。

この階層の農民群に関しては、一八三六年から一九三六年にかけてのピカルディ農村を対象とするフィリップ・パンシュメルの労作 (PHILIPPE PINCHEMEL, Structures sociales et dépopulation rurale dans les campagnes picardes de 1836 á 1936, 1954) の教えるところが興味深い。ここでは「メナジェ」、すなわち「節約家」、「しまりや」と呼ばれるものが、ベルナールの「マヌーブリエ」および「ブリコリエ」に相当する。

パンシュメルによると、メナジェとは総計一ないし五ヘクタールにしかならない数片の土地を耕作する零細農民の呼称である。彼らは馬をもたず、大経営の仕事を手伝う代りに土地の耕起をしてもらったり馬を貸してもらったりする。一九世紀のピカルディ農村におけるその比重は大きく、若干の村落では農業者数を上廻った。その農業者との間の労働力交換の方式は、メナジェの畑での農業者の鋤き起し労働一日が、農業者の畑でのメナジェの四日の労働という割合で行なわれた。メナジェ自身が馬を御する場合は三日である。そしてメナジェは、農業者の求める時は季節の如何を問わずそれに応じなければならない。メナジェの与える超過労働分は穀物で支払われる。

けれども、穀物に代る甜菜や牧畜の発達、とりわけ工業の発達が、やがて両者のこうした結びつきを破壊していき、彼らメナジェは次第に工場労働者化したり、専門の農業労働者になっていった。だが、すべてのメナジェがそうした農業離脱の道を辿るのか。パンシュメルによれば決してそうではない。メナジェとは、むしろ、「村落に根をおろした農業労働者であり、その社会的上昇の第一歩」であるとも云える。[註2] 次の段階は小規模の小作農業者である。つまり、農業

労働者から出発して小規模の小作農に、さらにはヨリ大規模の耕作者へと上昇する農民的進化の一階梯でもある。そしてパンシュメルは、「こうしたメナジェの進化はきわめて興味深いし、それだけでもってモット完全な研究を行なう価値がある」、と強調する。

メナジェのある者は、「死に物狂いの働きによってその経営を絶えず拡大し、次には一頭の馬、一頭の牛を買入れ、やがては小規模の経営者になることができるし、これらすべての過程は、明らかにヨリ大きな経営者を犠牲にして行なわれる。」(註3) だが、こうした上昇はいかにして可能になるか。パンシュメルはここで、『ピカルディ農村の人口減退』に関するガレ氏とビィヤール氏の共同研究 (GARET ET BILLARD, La dépopulation des campagnes picardes) の成果を援用する。すなわち、一八五五年頃、メナジェ家庭の年支出は普通一〇〇フラン、稀に一五〇フランであるにすぎないのに、彼らの年収入は、家族員の多い場合一、〇〇〇フランにのぼり、その「余剰分は一片の土地の買入れに充分になるまで隠されていた」、と。つまり、「しまりや」一家は生活費の極度の切りつめと人一倍の努力によって社会的階梯を上っていくというのである。

こうしたパンシュメルの考えは、いうまでもなく充分な実証を伴った理論ではなく、今のところ一つの単なる仮定でしかない。けれども、少くとも一九世紀末までのフランス農村を対象とする場合には、多分に尊重されてよい仮定であると思われる。ただ二〇世紀に入ってからの資本家的農業の社会においては、おそらくはあまり現実性のない考えであるように思える。甜菜の栽培がいかに多くの資本といかにすぐれた土地を必要とするかを考えるとき、資本家として成功するための要件がどんなものかを考えるだけで、それは自明ではないだろうか。

(註1)　ベルナール・一七三頁
(註2)　パンシュメル・八八頁
(註3)　パンシュメル・八九頁